向こう岸は夕焼けしているのだろう。子供時代のふとした一場面である。童画の中に誘い込まれるような、この作者独特の世界。

布引きの海につつーっと裁ち鋏を入れるがごとく船は進めり　越智敦子

べた凪の海を進んでゆく船を、やや上から遠望した場面。明るい海、やさしい風、何となく懐かしい風景を読者は思い浮かべることができる。表現のポイントは「布引きの海」。布を晒すために皺がないように広げたイメージで的確。ただ、「入れるがごとく」は外せる。「……つつーっと裁ち鋏」で、もう「入れる」は不要。

白樺の樹にはりつきて赤げらが天つ光を叩きていたり　今泉進

赤ゲラを目撃した楽しいひととき。コゲラはわが家にもやってくることがあるが、赤ゲラはなかなか見られない。「はりつきて」が独特だ。

目覚むれば世は仄暗く，病むわれを包める家はやはらかくあり　松岡秀明

大正時代から昭和初めの時代を覗くようなレトロな味わいが持ち味。結核の時代の「病むわれ」のような雰囲気である。家がやわらかいというは、心理的な感覚だろうが、やはり、マンションの部屋よりは木の外壁の家がふさわしい。

やすやすと両手をあげて　この世に来て二ヶ月経たぬ人の静けさ　駒田晶子

生まれて間もない赤ちゃんが寝ているのだ。母としてわが子をうたうのではなく、一存在として乳児をうたおうとモチーフが鮮明である。結句、確かな存在感をあらわすのに成功している。

水たまり消してゆくのが文明と乾いた街をバスに見ており　細溝洋子

都市に住んでいると土の道を歩くことがなく、水たまりを見ることも稀である。二十有余年前、八〇年代まではまだまだ未舗装の横道などがたくさんあったように思う。文明のことを考え、土の道があった昔を思っているだろう作者の思考の方位が読める。こういう批評的な視点に立つ作が「心の花」にもっとあっていいと思う。

何となく擦ってしまう癖残るお腹の中に吾子もう不在　堤幸子

出産して間もなくの母の歌である。男には分からない感覚だが、そんなこともあるのだろうと思う。読者は、作者の仕草を思い浮かべて、なんとなくユーモアを味わったりする。

いちにのさんで父は湯舟に移されるもはや土管の重みのなくて　藤島秀憲

「土管」という語がなんとなく淋しい。中が空洞のイメージがあるからだろう。介護の歌を作り続けている作者である。変化に乏しい介護の日々を、角度を変え、比喩を工夫してうたい続けている。「いちにのさんで」に、この作における工夫を読みたい。